

## 創造論と悪の起源

——「無からの創造」をめぐる——

上 沼 昌 雄

一、  
創造論は始源論である。すなわち、存在するすべてのものが、神の創造によって始まっていることを考察することである。存在の始まり、すなわち、アルケー、原理を創造のうちに認めることなのである。

存在の始まりを知ることが、存在の目的を知ることである。なぜならば、存在の意味や目的は、その存在の始源において知ることができるからである。このような意味で、始源論を創造論のうちに設定することができるならば、創造論は存在論に先立って、存在に意味を与えるものであることを認めることなのである。

創造論をぬきにして、存在論を近世の自律した理性によって説明しようとしたカントの理性批判は、ヴィットゲンシュタインによって、存在の意味と目的については何も言うことができないという沈黙へと導かれたのである。理性は物の成り立ちの有様について説明することができても、その存在の意味や目的については何も知ることができないという結論に達してしまったのである。

しかし、創造論を存在論に先行するものとして設定することができるならば、存在論の究極の解決をすでに得てい

ることなのである。創造論は、万物の存在の始まりを神の創造のうちに設定することである。そこに万物の存在の意味と目的を認めることである。それと同時に、神の創造のゆえに存在するすべてのものを善なるものとみていくことである。すなわち、存在しているものとして完全なものであり、欠けのないものであり、美と調和を備えているものと認めることである。創造論は倫理学的善の規定をも導き出すものなのである。

このように創造論は、存在するすべてのものの起源を神に帰すことであり、存在の意味と目的が導き出されることである。万物をその創造の下に存在するものとして善なるものとして設定することのできるようになるのである。万物の始まりを神の創造に帰すときに、どうしても解決しなければならない課題がある。それは悪の起源の問題である。世界が神によって創造されたもので満ちているならば、悪が存在し得る空間はあり得ないのである。すなわち、すべてが善なるものとして存在しているならば、悪が存在し始めることもないのである。

創造論は、存在論と倫理学にとっての規範を提示しているのであるが、悪の起源に関しては、未解決の問題を残しているのである。存在する世界に悪が現実存在していること、そして、不幸なことや悲劇的なことが人間のうちで起っていることは、創造論のなかでどのように説明されるのかについて、問いが残っているのである。

## 二

この問は、教会の教理が形成されてきた最初から避けることのできない大きな課題であった。ギリシアの宇宙論的二元論に対して、創造論による宇宙論を確立するために、この問は避けることのできない課題であった。ギリシア的な二元論においては、霊と肉の二元論に基づいて善と悪とはこの宇宙を形成する両極として初めから設定されていた

のである。悪はその場を物質・肉という世界に定められているのである。物質を先在するものとはみてはいないが、霊魂は先在するもので、不死であるという思考を明確にもっていた。身体（ソーマ）はその霊魂の墓場（セーマ）とというのが彼らの身体論であった。霊魂から最も遠く離れているもの、それが物質であり、人間の身体である。善なる霊魂から離れているので、それは悪なのである。

プロティノスによる新プラトン主義では、その物質なる世界は、霊魂なる世界からの流出によって出て来たものと説明されている。すなわち、霊なる世界から階段的に理性の世界を通して、物質の世界まで流出して出てきたものがこの世界であると考えられた。その最後が物質の世界であり、肉の世界であった。救済は、流出の道を逆にたどることによって、霊の世界にまで登りつめることなのである。そのため修練が哲学であった。グノーシス主義も同じような二元論によって悪の起源を説明している。二元論を初めから設定するならば、悪の起源の説明は、その枠組のなかで成立しているのである。

このような二元論的宇宙論のなかで、創造論による一元論によって宇宙を説明していくときに、悪の起源は避けることのできない課題であった。というのは、万物の創造により、存在するすべてのものは善であり、悪の入る余地はなかったからである。神の創造のなかには、悪は存在することはできないのである。悪は存在しない、すなわち、悪を無とみる見方に、初期の教父たちは傾いていったのである。無を悪の起源とみることに、創造論のなかで確認されてきた「無からの創造」とが、ここにおいて結びつけられて説明されてきたのである。

創造論のなかでの悪の起源の説明として、存在の欠如、善の欠如と考えたのは、アレキサンドリアのクレメンスであった。しかし彼は新プラトン主義とグノーシス主義の流出説を完全には排除しないで、一部その考えを取り入れることになったのである。すなわち、神は宇宙を無から創造したが、神だけが完全な善であって、創造された宇宙は必

然的に不完全であるとみた。そこに完全な善の欠如があり、それが悪の起源と考えたのである。<sup>①</sup>

クレメンスにおいては、欠如が「無からの創造」の無と直接に結びつけられていないが、欠如とすることによって悪を無とみる方向を開いたのである。そして徐々にグノーシス主義の影響から脱去して、創造論のなかで悪を無とみる思想が明確になってきたのである。その代表的な神学者として、ギリシア教父のなかからアタナシウスとラテン系の教父からアウグスティヌスをあげることができる。

### 三、

「無からの創造」という表現は、外典の第二マカベヤ書に見い出されるものである。その七章二八節で次のように言われている。「子よ。天と地を見なさい。そこにあるすべてのものをみて、神がそれらを無から創造されたことを知りなさい。そして人間も同様にして創造されたことを悟りなさい。」<sup>②</sup>

この概念は、直接正典のなかに見い出されないのであるが、初代の教会の教父たちの間では、一般的に聖書の創造論の教理として受け入れられてきたのである。しかし「三位一体」という概念がキリスト教の神を説明するのに絶対に必要な教理であるというほどには、厳密に論議されてきた訳ではなかった。「三位一体」については、「アタナシウス信条」のように、その教理そのものを信仰吉日の内容としたものがあるが、「無からの創造」については「使徒信条」においても説明されている訳ではないのである。

しかし、「無からの創造」という概念は、教父たちがキリスト教の創造論を取り扱うときに、基本的な教理として受け入れていたのである。特に創造論の論議が当時のグノーシス的な思想との対峙のなかでなされていたときに、キリスト教の創造論を明確にするために、悪の起源を論ずるために不可欠なものだったのである。

アタナシウスは、その『神のことばの受肉』*De Incarnatione Verbi Dei*において、神の創造と神の受肉とを同じ神の直接的なわざとして結びつけて、この「無からの創造」について言及しているのである。初めに神の無からの創造をプラトン派の考え方との対比のなかで語っている。プラトン派の考え方は、創造は何かすでに存在するものを用いてなされたというのである。そのすでに存在するものの起源については考えないのである。霊肉二元論に立つこの考え方のなかでは、「無からの創造」ということは成立しないのである。新プラトン主義やグノーシス主義においては、永遠の霊の世界からの流出されたものが物質の世界と考えられていたのである。何らかのかたちで、永遠に存在するものを前提としていたのである。そのなかで物質を悪の世界とし、霊を善の世界とみたのである。

これに対してアタナシウスは、神の教えのなかから、万物の創造が導かれることを提示しているのである。アタナシウスの論法の方法は、聖書の記述を根拠とすることである。それで初めにモーセの書の冒頭の「初めに、神が天と地を創造した」ということばを引用しているのである。次に「ヘルマスの牧者」のなかの、「神は唯一で、万物を無いものから造られた」という記述を取り上げているのである。

これに対して新約聖書のヘブル書一章三節が対応しているとみるのである。「信仰によって、私たちは、この世界が神のことばで造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るのです。」アタナシウスはこれをパウロの書とみているのであるが、ここから結論として「神は、神ご自身のことばである、私たちの主イエス・キリストによって、万物を無から創造された」という命題を導き出しているのである。「無からの創造」と「神のことばによって」という二つの概念を、アタナシウスは切り離していないのである。

この命題を前提として、アタナシウスは創造論と救済論とを結びつけているのである。そのために創造されたもの

を善とみることから出発しているのである。神は善であり、すべての善の源であり、造られて存在するものも善なるものとみるのである。なぜならば、神のことが紹介しているからである。被造の世界を善とみることが、物質を悪とみるギリシア的な思想に対してのキリスト教の自然観を提示していることになっているのである。そして、人間も神のことはにより、神のかたちに似せて造られているので、無から造られているが、神と一つのものとして存在し、善なるものであるとみているのである。

このような状態にある人間に対する神の命令は、善悪の知識の木について、「それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ」(創世三章一七)ということであった。それは、造られた状態の崩壊を意味していた。ここでアタナシウスはその崩壊、すなわち死は、人間がそこから造られた無の状態に帰ることであるとみている。それは、神にとって無の世界であり、存在しない世界なのである。アタナシウスはこの崩壊について次のようにいっている。「というのは、人間は、存在しない以前の状態から、神のことはの臨在と愛によって存在するものと導かれたのであるから、人間は神を知ることがなく、存在しなかったところに戻るならば(というのは、悪というのは存在しないもので、善というのは存在するものであるから)、存在している神からその存在をいただいているので、その存在を永遠に欠くこととなるのである。別の言い方では、人間は崩壊しており、死と破壊のなかにとどまっているのである。」<sup>⑤</sup>

このようにアタナシウスは、死を人間がそこから出てきた無の状態に戻ることとみており、それは存在している神に反する状態とみているのである。そして存在するものは神との関わりがあるので、それは善なるものなのである。さらに存在しないものは悪なのである(οὐκ οὐρα γὰρ ἐστὶ τὰ κακά, οὐρα δὲ τὰ κακά)。悪は、人間が無から造られたその無のことなのである。

人間がこの無の状態に向いているということは、神のことはによって造った神自身にとって、不都合なことなのである。神はこのままにしておくことができないと考え、無に向いている世界を再創造する必要があった。そのため神のことはを人間と同じ肉の状態に造ることによって、無に向いている人間の方向を逆にしようとしたのである。これがアタナシウスの受肉の教理であった。この受肉は十字架と復活によってその目的が完成したのである。それによって悪に向いていた人間に、善である神に向く方向が与えられたのである。アタナシウスにとっては、創造論と救済論とがここで結びついているのである。共に神のことはが媒体として働いているのである。創造のときに媒体として働いた神のことはであるキリストが、救済においても仲介者として働いているのである。

アタナシウスにとっては、この神のことはであるキリストは、無からの創造のなかに含まれていないのである。このことはアリウスとの論争の中心点であった。アリウスも「無からの創造」の教義を明確にもっていた。アタナシウスもアリウスもこの点において、異教の哲学に対してキリスト教の立場を明確にしたのである。A・ラウスは、このことは「神と被造物との間には完全な断絶があるということ、すなわち、創造の所産ならざる自在的存在者と神の意志によって無から創造された存在者との間には完全な断絶があるということであった」と説明している。<sup>⑥</sup>

しかしアリウスは、神のことはであるキリストを「無から創造」された被造物の領域に入れ、その被造物の最初のものとしたのである。アタナシウスは、神のことはであるキリストを神の領域のものとしたのである。この違いがニケア会議の論争点であった。ニケア信条はこの違いを明確に語っているのである。信条の最後に呪いを語っている部分で次のようにアリウスの教えを語っている。「主の在し給わなかった時があるといい、生れ給う前には主は在し給わなかった(οὐκ ἦν ποτε ὄτε οὐκ ἦν, καὶ πρὶν γεννηθῆναι οὐκ ἦν)といっている者ら」は呪われよ、<sup>⑦</sup> である。すなわち、主は存在しなかった時があり、そこから神によって造られたというのである。

アタナシウスがことはである御子を厳密に神の領域に帰することによって、御子と御父との同質性(ὁμοούσιον)を

主張することができたのである。この論証に基づいてキリスト教の中心的な教理である「三位一体」という教えが確立してくるのである。アタナシウスにとって御子は神の領域に属することであって、被造物と断絶しているのである。そのことのゆえに、神のことは受肉の意味も明確にされているのである。このようにアタナシウスによって「無からの創造」の教理をめぐって、悪の起源、御子の受肉、三位一体という教義が理解されているのである。

## 四、

アタナシウスの神学が東方のギリシア教会の基盤となっていたときに、アウグスティヌスは西方のラテン教会において、悪の問題と創造論について取り組んでいったのである。悪の問題は早くからアウグスティヌスの心を捕えていたのである。マニ教時代にはアウグスティヌスは、悪の起源を完全に二元論的にみていた。マニ教は、悪を善に対立する何らかの実在する実体であるとみていた。アウグスティヌスは自分がマニ教の下にあったときを振り返って、「じっさい、当時の私は、悪はいかなる実体でもないし、われわれの精神は最高不変の善ではないということを知らず、学んでもいなかったのです。」と告白している。

一時アウグスティヌスは、マニ教の下で、この悪の問題を解決したと思っていたが、神の創造の教理を理解していくなかで、マニ教のように悪を善に対立する何らかの実在する実体とみることは、神を悪の原因とみることになることを知り、マニ教の教えから離れるのである。「そこで私は安心してその原因を探究し、マニ教徒のいうことは真実でないことを確信し、心の底から彼らをさけていました。彼らは悪の起源をたずねながら悪意にみち、そのために自分の実体が悪をなすのだと考えるよりはむしろ、あなたの実体が悪をこうむるのだと考えようとしていることが、私に

はわかっていたからです。」<sup>⑧</sup>

アウグスティヌスは、キリスト教の創造の教えを認めると同時に、悪の問題については続いて考えていったのである。特に神の創造のわざのゆえに、悪の起源についての思索をより深めていったのである。神は不滅でなければならず、その神の造った被造物の世界は有限でありながら、しかも無限の神にみたまされっていると確認したときに、悪の問題がアウグスティヌスの心をとらえたのである。「そこで悪はどこから生ずるのかと問うてみました」という問を彼に向けているのである。

神の性質と神の創造のわざを認めた上で、悪の問題が出て来ていることを知るのであるが、それは問にとどまっているのである。「これこそは神だ。これこそは神の創造したもうたものだ。神は善であって、これらの被造物をけたはずれに凌駕しておられる。にもかかわらずこれらのものは、善き神が創造したのだから善いものだ。それにしても神は、これらのものをどのようなかたでとりかこんでみたすのだろうか。いったい、悪はどこに存在し、どこからどのようにして忍びこんできたのだろうか。悪の根は何で、種子はどのようなものだろうか。それともそのようなものは何も存在しないのだろうか。」<sup>⑨</sup>

アウグスティヌスはこの問を単に神学の問として取り上げているのではなく、彼自身の避けることのできない問として取り組んでいたのである。悪の問題への取り組みの苦悩の深さが、アウグスティヌスの神学の深さを築いていったのである。J・B・ラッセルは、ある伝記作家のことばとして、「悪の問題をキリスト教の核心に据えた、かれのおそろしい集中力」<sup>⑩</sup>を認めているのである。ラッセル自身も「悪魔の暗い影を考えなければ、アウグスティヌスの宇宙は理解できない」<sup>⑪</sup>といている。アウグスティヌスは、キリストを信じる信仰に導かれたあとにも、なお悪の問題について苦しんでいたことがわかる。「これらのことを完全に、ゆるぎなくかたく心に信じながら、しかも私は悪はどこ

から生ずるのかとはげしくたずねました。その心は何という産みの苦しみをなめ、何といううめきを発していたことでしょうか」と告白している。

アウグスティヌスは、このような苦しみを避けることなしに、聖書によってその苦しんでいる自分自身を神の光の下に吟味していくのである。「そこで私は、それらの書物から自分自身にたちかえるようにとすめられ、あなたにみちびかれながら、心の内奥にはいつてゆきました。」その心の内奥で「私こそ在りて在る者」という神をみているのである。

そしてその神の造られた世界、その世界に存在しているすべてのものを善いものとみるのである。善でないものは、滅びるものなのである。このことを確認した上で、悪の問題について次のようにいっているのである。「このように存在しているものはすべて善いのであって、私がこれまで『どこから生ずるのだろう』とたずねていたあの悪なるものは、実在ではなかったのです。もし実在するものだとなれば、善いものはずですから。」悪は善の欠如なのである。そして悪というものは実体という存在はないのであるから、悪とは無なのである。神の造られた世界はすべて善いものとして存在しているのであって、悪の存在する余地はないし、神にとっては悪なるものは存在しないのである。「あなたにとっては、悪などというものはまったく存在しません。あなたにとっては存在しないばかりでなく、全被造物にとっても存在しない」とはっきりいっているのである。

このようにアウグスティヌスが悪を非存在とみる理解は、キリスト教の創造論から規定されているのである。キリスト教においては、すべて存在するものは、神から与えられているのであって、存在すること自体は神によっているのである。したがって「悪は存在しない」というのは、神によって創造されている世界には悪なるものは存在しないということなのである。

山田晶は、ここにおけるアウグスティヌスの悪の「非存在」について、それをプロティノスから受け継いでいるが、プロティノスとは異なる意味において理解していることを指摘している。プロティノスにとって「非存在」とは「形相の欠如」にはかならなかつたのであるが、アウグスティヌスは「非存在」を形相の欠如としてでなく、まったく存在そのものの欠如として受けとっているのである。

プロティノスはその『エネアデス』において、この形相の欠如について説明している。すなわち、それは「絶対的な非存在」という意味ではなくて、たんに存在とは異なるものという意味で用いるのである」が、その意味していることは次のことである。「悪は、適度との関係において、いわば適度のなさで、形の付与との関係においては、形のなさであり、自足性との関係においては、たえざる不足であって、永久に無規定なもので、決して静止せず、完全に受動的で、満たされることのない、まったくの貧しさである」といっている。

アウグスティヌスが悪を「非存在」というときにはプロティノスのいう「形相」も、それに対応する資料もない、まったくの非存在ということをしているのである。アタナシウスの場合には、この無を「無からの創造」に結びつけて、悪の起源を創造以前の無の世界とみるのである。それに対しての救済論を展開しているのであるが、アウグスティヌスの場合には、悪を「非存在」、すなわち、無とみても、「無からの創造」の無の起源とは説明していないのである。

アウグスティヌスは、創造の過程の説明においてプロティノスの形相の概念を取り入れているのである。創世記の冒頭のことばについて、神は天と地とを無から造られたことを明記している。そこでアウグスティヌスはあえて、「あなたは、天と地を、あなたから造られたものではありません」といい、無から造られたといっているのである。天地は神によって造られたが、神から造られたのではないのである。そのために「無からの創造」ということがアウグスティ

ヌスにとって欠かすことのできない教理となったのである。

この理解の上で、神が天と地とを無から造られたとき、天は何か偉大なものであり、地は何か小さなものと考えられるのである。「あなたは存在したもうた。他は虚無だった。その虚無からあなたは、天と地という二つのものを造りたもうた。一方はあなたに近く、他方は無に近い。一方より高きものはあなたにあるのみ、他方より低きものは虚無のみ。」この地はまだ形相をとまなっていない、無形資料であって、無に近いものなのである。闇がおおっている状態、光もない状態なのである。神はこの無形資料から、この世界のすべてのものを創造したと理解するのである。プロティノスの考え方を取り入れることによって、無からの創造を二段階的に説明しているのである。

プロティノスは、この形相をかいている資料を悪の起源と考えるが、アウグスティヌスは無形資料は無に近いものであるが、そこから悪が出て来ているとは説明していない。無そのものを悪の起源とは考えないのである。

## 五、

創造論を厳密な意味で考えていったときに、万物は神による創造のゆえに善なるものとみなされる。そこに悪の入る余地はまったくない。そこで悪を無、すなわち、非存在とみるのである。アタナシウスとアウグスティヌスはこの点において同じ立場をとっている。しかし、その無をアタナシウスの場合には「無からの創造」に結びつけて説明しているのである。無からの創造であるが、神のことばによって造られているということを取り入れることによって、被造の世界の神のことばの関わりをとらえているのである。墮落はこの世界がもう一度無の世界に戻ってしまうことであって、その回復のために同じ神のことばであるキリストが遣わされる必要があったのである。アタナシウスは、

創造論と救済論との神学の全体の粹組の理解へと移っていくのである。ですから、悪を根本的に非存在、すなわち、無と考えたのであるが、同時にその無を支配する悪意をもって活動する力が存在することを認めていたのである。悪魔は天から落ちた天使であるが、アタナシウスは、どうしてこの天使が天から落ちることになったのかについての深い議論はしていない。ただし、この悪魔の働きは、神の創造の秩序をだめにするものであるとみているのである。無秩序と闇と無と非存在がこの悪魔の働く世界なのである。この悪の力からの解放のために神のことばの受肉の必然性を論じているのである。アタナシウスにとっての悪の問題は、彼の神学の全体の構成を築くための一つの要素として働いているのである。

アウグスティヌスは、悪を非存在、すなわち、無ととらえているが、アタナシウスのような神学の全体の構成の問題としては展開していないで、悪の現実の問題から、その起源の問題そのものの洞察を深めているのである。悪を無と規定しても、道徳的な悪の存在を否定することができないのである。アウグスティヌスはここでその悪が生じてきた天使の墮落における自由意志の問題に焦点をあてているのである。

しかしここにおいても天使がその自由意志によって悪を選びとったその働きは何なのかということ、解決不可能な問題をかかえることになるのである。自由意志が選べる悪が何らかのかたちで存在するとすれば、それを造ったのは神ということになってしまうのである。しかしこのような立場はどのような場合でもとることはできないのである。とることのできる唯一の理解は、この自由意志による以外に原因はないということである。自由意志そのものは悪の原因ではないが、自由意志の選択が悪の原因ととることなのである。それでも神はどうしてそのような自由意志を天使と人間に与えたのかという問は残ってしまうのである。アウグスティヌスはこの自由意志の働きのなかで罪として表われでてくるものとして高慢さを取り上げている。契約の破棄という行為よりも、罪そのものの性質をみてい

るのである。しかし悪の起源そのものの問題からみると、そのような高慢さがどこから入って来たのかという問は残るのである。

このようなアウグスティヌスの理解についてJ・B・ラッセルは次のようにいつている。「キリスト教神学に以前からあった道徳的な悪と存在論的な欠如との混同をアウグスティヌスが受け継ぎ、さらに後代へ伝えた。二元論に反論するために、かれは欠如論を使った。神と神の被造物以外に存在するものはない。それ以外の何かとはじつは何かではなく無、すなわち善の欠如にほかならない。ただひとつの原理——神——のみが存在し、実在する物はすべてそこから出てくる。宇宙に孔があることをなぜ神は許しているのかという問に対して、ひとつは道徳的な答えがある。意志の自由には悪を行う実質的な自由が必然的に伴う、というのである。」<sup>28</sup> 道徳論的な説明においては、「宇宙のために最大の善を実現するため、知的被造物——人間と天使——に神が自由意志を与えるということである」<sup>29</sup> ことがただ唯一矛盾のない立場として出てくるのである。

この天使と人間との自由意志と、神の全知全能性ととの二つの命題が真であることを認めていくなかで、アウグスティヌスは予定説の問題にまで進んでいるのである。自由意志と予定説とがアウグスティヌスの神学の重要な要素となっているのである。

## 六、

創造論がキリスト教にとって重要な教理として確立していくときに、「無からの創造」という教理は、神と被造物との区別を明確にする上に役立つてきたのである。被造物はいかなる意味においても神ではないが、神によって造られる

ているので、その存在において善なるものである。この創造論のなかで悪の起源を論じようとするときに、悪は非存在、すなわち、無とみることが一般的に受け入れられてきたのである。その無を「無からの創造」の無とみることによって、キリスト教の創造についての解釈のなかに、混沌から秩序へという粹組が入ってきたことが分かる。アタナシウスは悪の起源を直接的に創造が出てきたところの無とみることによって、墮落によってその無に陥いろうとする世界に対するキリストによる再創造としての救いを考えたのである。

アウグスティヌスは、悪の起源を「無からの創造」の無とは直接に結びつけてはいないが、創造された天と地の地を無形質料とみることによって、その地を無に近いものとするのである。その無形の地から形のあるこの世界を造ったとみることによって、混沌から秩序へという粹組を取り入れているのである。

しかしこの粹組は、悪の起源についての解答は与えてくれないのである。どこから混沌という状態が入ってきたのかについては説明していないからである。キリスト教の具体的な説明は、天使の墮落によってなされているが、その天使の悪そのものの起源については説明しつくされていないのである。むしろ説明しつくすことができないということが、この悪の起源の問題であるといえるのである。

「無からの創造」の教理は、神と被造物との絶対的な区別を示すのに有効であるが、混沌から秩序へという粹組を取り入れてしまうものであるという意味においては、再考が必要なテーマなのである。

## 注

- ① J・B・ラッセル『サタン——初期キリスト教の伝統』、野村美紀子訳、(東京・教文館、一九八七年)一一三、一一四頁を参照。
- ② 新共同訳聖書においては次のように訳されている。「子よ、天と地に目を向け、そこにある万物を見て、神がこれらのものを既

に在ったものから造られたのではないこと、そして人間も例外ではないということを知っておくれ。」

- ③ 「ヘルマスの牧者」の第二巻の Commandments の第一章。
- ④ *De Incarnatione Verbi Dei* 卷 III 頁 11。
- ⑤ 前掲書、四の五。
- ⑥ A・ラウス『キリスト教神秘思想の源流』、水落健治訳（東京・教文館、一九八八年）一三六頁。
- ⑦ ラウスは次のようにいっている。「神と世界との間には、両者を媒介するいかなる領域も存在しないのである。これ以前の初期キリスト教徒たちは、神と世界との関係についての理解を定式化しようと試みるに際し、ある中間領域を設定して、これを神の〈ロゴス〉と同一視していた（これは中期プラトニズムに見られる考え方である）。しかるにいまや、このような中間領域の介在は認められないこととなった。アリウス論争において提示されたのは、このような状況の中で神と世界との関係をいかに考え直すか、ということだったのである。そして、この再考の結果は劇的であった。アリウスが〈みことば〉を被造物の領域に帰したのに対し、正統主義は〈みことば〉を（厳密な意味で）神の領域に帰したのである。」前掲書。
- ⑧ アウグスティヌス『告白』、四の一五。訳は『告白』「世界の名著」 山田晶訳（東京・中央公論社、一九八八年）による。
- ⑨ 前掲書、七の三。
- ⑩ 前掲書、七の五。
- ⑪ 前掲書、七の六。
- ⑫ J・B・ラッセル『サタン』、二二二頁。
- ⑬ 前掲書、二一〇、二一一頁。
- ⑭ アウグスティヌス『告白』、七の七。
- ⑮ 前掲書、七の一〇。
- ⑯ 前掲書、七の一二。
- ⑰ 前掲書、七の二三。
- ⑱ 山田晶『アウグスティヌス講話』（東京・新地書房、一九八九年）三三三頁を参照。
- ⑲ プロティノス『エネアデス』、一巻の三。

- ⑳ アウグスティヌス『告白』、二二の七。
- ㉑ 前掲書。
- ㉒ J・B・ラッセル『サタン』、二二四頁。
- ㉓ 前掲書。

（聖書宣教会・教師）